

Title	批判的コミュニケーション論における「政治的なもの」の再検討：N. Couldryのメディア理論を手がかりとして
Sub Title	
Author	山腰, 修三(Yamakoshi, Shuzo)
Publisher	慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
Publication year	2014
Jtitle	メディア・コミュニケーション：慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要 (Keio media communications research). No.64 (2014. 3) ,p.41- 51
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20140300-0041">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20140300-0041</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 批判的コミュニケーション論 における「政治的なもの」の 再検討

——N. Couldry のメディア理論を手がかりとして——

山腰修三



## ▶ 1 カルチュラル・スタディーズ以降の批判的コミュニケーション論

批判的コミュニケーション論と呼ばれる研究領域は、具体的な政治的・社会的状況の中からメディアの果たす機能を明らかにしようとする点にその特徴がある。批判的コミュニケーション論にとって「理論」とは、そうした課題に取り組むための道具である。すなわち、第一に、メディア・テキストの生産・流通・消費過程、メディア利用の動態やメディア制度といった諸相を政治的、社会的な状況との関係から説明するためのものであり、第二にその関係性を権力や民主主義の観点から批判的に考察するためのものである。このような視座から批判的コミュニケーション論は政治理論や社会理論の諸概念を積極的に取り入れ、操作化し、分析枠組みの洗練化や再構築に取り組んできた<sup>①</sup>。

周知の通り、1980年代以降の批判的コミュニケーション論の理論的發展はカルチュラル・スタディーズによって牽引されてきた（山腰 2012）。カルチュラル・スタディーズは主としてテレビのオーディエンスに注目しつつ、日常的なメディア文化の中で展開される不可視の権力闘争、すなわち「政治」<sup>②</sup>を発見し、批判的研究を積み重ねてきた。イデオロギー論、記号論、構造主義、ポスト構造主義の諸概念を積極的に参照しつつ、カルチュラル・スタディーズが進めてきた批判的コミュニケーション論の理論的視座転換は次の点である。第一に、マス・コミュニケーションを「意味づけをめぐる政治」の過程と捉えなおしたことである。第二に、オーディエンスをそうした「意味づけをめぐる政治」に能動的に参加する主体、すなわち「能動的オーディエンス」と位置づけたことである<sup>③</sup>。そして第三に一連の「政治」はアイデンティティの構築・維持ないし統制・抑圧・排除と密接に関連し、オーディエンスの日常生活や文化の領域で展開する多様な闘争の形態をとると論じたことである。このように、カルチュラル・スタディーズは批判的コミュニケーション論における「政治」を文化・日常生活の領域へと拡張し、また、「政治」の多様性や複数性を強調した。

カルチュラル・スタディーズに対する批判もこの「政治」をめぐる展開してきた。代表的には、カルチュラル・スタディーズがメディア・オーディエンスにかかわる多様なアイデンティティの政治を焦点化する一方で、制度や政策の分析に主たる関心を寄せてこな

かった、というものである (Ferguson and Golding 1997)。つまり、日常的なメディア文化における「政治」を強調する一方で、それと政策や制度のレベルにおける「政治」との関係性を明らかにしていないのである<sup>(4)</sup>。それはまた、日常的なメディア文化においてどのように「政治」が生成し、展開し、制度化するのか、という問題とも関わっている。

さらに、カルチュラル・スタディーズはメディア文化に関わるさまざまな側面に「政治」を発見しようとしてきたが、デジタル化とインターネットの発達によって特徴づけられる今日のメディア環境は、これまで以上に公的・私的生活のあらゆる領域や実践と密接にかかわっている。つまり、メディア環境の変化によってネットワーク型の社会関係が生まれ、新たな「政治」の可能性が主張される一方で、日常的なメディア文化の何が「政治」で何が「政治」ではないのか、その境界線が不明瞭となっている<sup>(5)</sup>。

これらはいずれも批判的コミュニケーション論における「政治的なもの (the political)」とは何かを改めて問うものである。カルチュラル・スタディーズはそれらの批判に対する応答に積極的に取り組んできたとは言いがたい。むしろ、カルチュラル・スタディーズは「政治的なもの」をめぐる理論的な「停滞」状態にあると言える。つまり、カルチュラル・スタディーズは「政治の複数性」「政治の拡大」が「政治的なもの」との関連において何を意味するのかを自己反省的に問うことなく、日常的なメディア文化における多様な権力と抵抗を「発見」するための事例研究を蓄積してきたのである。そしてその結果、カルチュラル・スタディーズによって主導されてきた批判的コミュニケーション論における「理論」と、急速に展開し、変化する今日の政治とメディアをめぐる諸状況との間にギャップが広がりがつある。

したがって、改めて批判的コミュニケーション論における「政治」の対象とその分析枠組みを再検討する必要がある。だが、第一にそれはカルチュラル・スタディーズからの断絶、あるいはカルチュラル・スタディーズの否定を意味しない。むしろ、カルチュラル・スタディーズの「政治の複数性」や「政治の拡大」という理論的プロジェクトを「政治的なもの」をめぐる政治理論や社会理論の議論に接続させるものである。それは次の点を問うものである。すなわち、批判的コミュニケーション論が分析対象とすべき「政治」とは何か、いかなる分析枠組みを構築することができるのか、そしてその際に、どのような政治理論・社会理論の概念が有効なのか、という点である。

そして第二に本論ではカルチュラル・スタディーズ以降のメディア研究の取り組みにその手がかりを求めることにしたい。先述の通り、カルチュラル・スタディーズは現在、理論的な「停滞」状態にあるとの認識は広く共有されている。そしてそのような「危機」を乗り越えようとする試みもなされつつある (Smith 2011)。本論ではとくにカルチュラル・スタディーズを出発点としながらも政治理論・社会理論を取り入れながら独自のメディア理論を構築しつつあるニック・クドリー (Nick Couldry) の取り組みに注目する。クドリーは「政治的なもの」について中心的な議論を展開しているわけではない。しかし、本論ではクドリーの問題意識やアプローチを参照しつつ、そこに批判的コミュニケーション論において「政治的なもの」を再構成する契機が存在することを示すことにしたい。

## ▶ 2 ヘゲモニー論における「政治的なもの」と「社会的なもの」

「政治的なもの」をめぐるカルチュラル・スタディーズの困難性に向き合い、批判的コミュニケーション論の分析枠組みの再構築を構想する上で、日常的なメディア文化における (1) 「政治」と「非政治」の峻別と、(2) 「政治」の生成・展開・制度化の過程、の二点について検討を行う必要がある。その際に示唆に富むのが、「政治的なもの」は日常生活の中で不可視化・自然化しているという観点から「政治」の動態を捉えるヘゲモニー論における

言説分析のアプローチである。

ヘゲモニー論を言説分析の観点から再構成してきたエルネスト・ラクラウは、「政治的なもの」を「社会の制度化の契機」として捉える視座を提起した（ラクラウ 1996 = 2002 : 92）<sup>6)</sup>。ラクラウはヘゲモニー闘争を通じて社会秩序が生成する過程を言説理論から説明するが、その過程でヘゲモニー闘争を「政治的なもの」と「社会的なもの（the social）」の関係性から捉える独自の議論を展開したのである（Laclau 1990）<sup>7)</sup>。

この場合、「社会的なもの」は「沈殿化した（sedimented）社会関係の総体」（Torfing 1999 : 305）、「政治的なもの」は「社会的なものの構築と解体の局面」（Bertramsen, Thomsen and Torfing 1991 : 29）と定義される。この定義からも明らかなように、「社会的なもの」は「政治的なもの」を通じて構築され、秩序化される。社会諸関係の複合的な全体としての「社会的なもの」は、特定の意味づけ、解釈を可能にする「地平」となる（Torfing 1999）。いわば、日常生活を組織化するコードや規則、規範を可能にするのがこの「社会的なもの」である。「社会的なもの」は本来に多様な編制の可能性を持つが、「政治的なもの」を通じてある特定の形態をとる。当初、その「政治的起源」は可視化されている。だが、日常生活が反復される中で、次第にその「起源」は忘却され、「当たり前のもの」と受け取られ、自然化する。これが「沈殿化」と呼ばれる状態である。一方で、対立や紛争、社会運動、改革などを通じて既存の秩序に異議申し立てがなされると「社会的なもの」の政治的起源が再び露わになり、このとき「政治的なもの」は「再活性化（reactivation）」の状態となる（Torfing 1999 : 69-70）。

換言すると、沈殿化は社会関係の<制度化>の過程を指し示し、再活性化は<政治化>の過程を指し示す（Bertramsen, Thomsen and Torfing 1991 : 31）。重要な点は、「政治的なもの」も「社会的なもの」も、完全に全体化することはない、という点である。つまり、「社会的なもの」が「政治的なもの」の痕跡を完全に消し去ることは不可能であり、つねに政治化に対して開かれている。同様に、「社会的なもの」がすべて政治化することもない。つまり、政治社会秩序は、「沈殿化」（=制度化）と「再活性化」（=政治化）の往復運動の中で変化すると理解されるのである。

以上の「政治的なもの」と「社会的なもの」との関係をめぐる言説分析の議論は、日常生活・文化における「政治」を問うという点で、カルチュラル・スタディーズと視座を共有している。その一方で「政治的なもの」が「社会的なもの」の中で不可視化するメカニズムに着目する点、そして「政治的なもの」の動態を論じている点は、カルチュラル・スタディーズの抱える困難を乗り越えた分析枠組みを構想する上で示唆に富む。つまり、日常生活・文化における「政治」の発見にとどまることなく、「社会的なもの」の秩序化の過程と「政治的なもの」の再活性化、という観点からメディアの果たす役割を問うことが重要である。

この観点を発展させるために、以下ではニック・クドリーのメディアと新自由主義の理論的研究について検討を加えることにしたい。クドリーのメディア研究に注目する理由の第一は、クドリー自身は上記の言説分析の発想を直接参照してはいないものの、同様の観点から「社会的なもの」の秩序化とメディアをめぐる独自の議論を展開しているためである。そして第二にクドリーはカルチュラル・スタディーズを出発点としながらも、それを乗り越える理論的取り組みを行っているためである。クドリーはいかなる概念や理論的枠組みによって「社会的なもの」の制度化や変化の可能性を論じているのであろうか。そしてそれを踏まえてどのような批判的コミュニケーション論の分析枠組みを展望することができるのであろうか。次章ではクドリーの「社会的なもの」とメディアの関係について検討を加えることにしたい。

### ▶ 3 クドリーのメディア理論と「社会的なもの」の秩序化

#### 3-1 クドリーのメディア理論の特徴

周知の通り、ニック・クドリーはカルチュラル・スタディーズ以後の理論的再構成に積極的に取り組んできた代表的なメディア研究者の一人である。クドリーは理論研究の現状を批判してきた。以下の記述はやや冗長ながらもそうしたクドリーの立場を表している。

かつて、アルチュセールやラカンについて熱心に論じることなく、メディア研究において何か意義のあることを言うことが不可能な時期があった。多くの研究者たちにとって安堵すべきことに、そうした理論化を過剰に強いる時代は終わった。だが、このことは、メディア研究と理論との関係が今や健全であることを意味しない。それとは反対に、今日のメディア研究は、理論のまったく存在しない領域か、ドゥルーズやマノヴィッチなどの理論によって満たされた個々の容器の中のいずれかで行われる傾向にある。これらの個々の容器の間につながりはなく、より広範な議論の場へと結びつくこともない。別のメタファーで論じるならば、我々は1990年代後半に、理論的超過というパーティーを徹夜でうろつき、夜明けに「ポスト理論」という砂漠にいることに気づいたのである。この砂漠では、なぜ理論を必要とするのか、そして競合する諸理論の利点をどのように比較すべきか、といったことを問う努力さえ、我々の手を離れてしまったかのようにみえる (Couldry 2008: 161)。

一連の記述は、カルチュラル・スタディーズ以降のメディア研究およびマス・コミュニケーション研究が二分され、一方は理論を軽視する傾向にあり、もう一方は特定の理論の枠に留まり、他の理論潮流との対話や具体的な政治社会の批判的分析を軽視する傾向にあることを批判したものである。それに対してクドリーは、既存の理論的成果を踏まえながらも、従来の研究で十分に言及されてこなかった政治理論や社会理論の諸概念<sup>6)</sup>を積極的に参照し、メディア理論の再構築を試みている。そしてその際に「社会志向のメディア理論 (Socially oriented media theory)」と自ら名づけた理論的立場を標榜する。クドリーは、メディア理論の基盤となる四つの方法論を提示している。すなわち、①テキスト分析からのアプローチ、②政治経済学からのアプローチ、③メディアの技術的特性に注目するアプローチ、そして④メディアの社会的利用に注目するアプローチ、である (Couldry 2012: 6-9)。テキスト分析や政治経済学のアプローチを主としていたかつてのメディア研究の中心が、次第にメディアの技術的特性に注目するアプローチへと移行しているとの認識を示したうえで、自らの立場は四番目のアプローチを基盤とするとしている。すなわち、「いかにメディアが社会生活の中で利用されるのか」「どのようにメディアが社会それ自体を形成するのか」「メディアを通じて伝達される意味がいかなる社会的影響をもたらすのか」という問題意識に根差したアプローチがクドリーの「社会志向のメディア理論」である (Couldry 2012: 8)。

以上の議論は一見するとオーディエンスのメディア実践に注目するカルチュラル・スタディーズと大きな違いを見出すことは難しい。事実、こうしたオーディエンスの実践への注目以外にもクドリーの議論はカルチュラル・スタディーズからいくつかの重要な知見を継承している。

メディアは生産—伝達—受容の閉じられた回路とはみなされなくなった。むしろ、空間を横断した「媒介」のより広範な諸過程とみなされている (Couldry 2012: 13)。

メディアと呼ばれるコミュニケーションの基盤における諸変化は、常に技術的、経済的、社会的、政治的諸力の〈交わり〉から生じる (Couldry 2012: 13)。

一連の記述はマス・コミュニケーションの一方的な伝達モデルに対する批判、そして

メディアをめぐる社会の諸力への注目、という点において例えばロジャー・シルバーストンのようなカルチュラル・スタディーズを基盤とし、そこから発展してきたメディア研究と多くを共有していることがわかる（シルバーストン 1999 = 2003）。しかしながら、クドリーは「社会的なもの」に対する独自の問いを立てている点において、先行するメディア研究者と異なっている。

メディアについて考える中で、ある種のメディア理論を参照し、発展させることにしたい。そうした社会理論とは、「社会秩序」を可能にするような表象の役割、表象をめぐる権力、表象の技術との関わりについて取り組むものである。社会秩序は所与のものでも、自然なものでもない。社会秩序は実践を通じて構築されるものであり、象徴を通じて表象されるものである。そして社会生活の「秩序」に関するメディア表象は、当該秩序の成立と機能に寄与するのである（Couldry 2012 : x）。

すなわち、クドリーは「社会的なものおよびその秩序化の過程を表象するもの」としてメディアを捉えている（Couldry 2012 : x）。「社会的なもの」の秩序化の過程において果たすメディアの役割という問題設定こそが、先行する他のメディア研究に対するクドリーのアプローチの大きな特徴である。こうした社会の秩序化においてメディアが果たす役割を明らかにするうえでクドリーの議論は次の特徴を持っている。すなわち、第一に、メディア環境が大きく変化する中で、メディア実践の概念を拡張している。第二に、政治理論や社会理論から新たな概念を取り入れつつ、「社会的なもの」の秩序化に関する新たな視点を提供している。そしてそれを通じてメディアと政治社会に関する批判的分析を進める上でカルチュラル・スタディーズからの視座転換を試みているのである。

### 3-2 「社会的なもの」の秩序化と象徴権力

それでは、クドリーは今日のメディア環境における「社会的なもの」の秩序化のメカニズムをどのように説明しているのだろうか。クドリーは「社会的なもの」の秩序化においてメディアが果たす役割を強調するが、ここで注目すべきは、「実践」と「表象」という概念の拡張を図っている点である。

第一に、クドリーはデジタル化が進展した今日のメディア環境において、メディアに関する実践をメディア・テキストの生産や受容（解釈）の過程として捉えるだけでは十分ではなく、より広い観点から理解する必要があると論じている（Couldry 2012 : 35, 44）。すなわち、クドリーにとってメディアと関連するあらゆる行為や経験が「メディア実践」に含まれるのである。「エンコーディング／デコーディング」のような従来の批判的コミュニケーション論のモデルにおいては特定のメディア・テキスト（例えばニュース番組）を誰がどのように解釈したのかが問われる。しかし、クドリーはそれに加えてそうしたメディアとのかかわりで人々が何をしているのかが重要であるとする（Couldry 2012 : 37 参照）。例えばそこには朝のニュース番組を通じて生活のリズムを構築する行為やニュース・メディアに対する冷笑的な態度やふるまいなども含まれる。つまり、特定のニュース・テキストをめぐる意味づけのみならず、ニュース・テキストが生産され、消費されることそれ自体が社会の中でどのように意味づけられているのかも問われているのである。このように、クドリーの「実践」は、日常生活におけるメディアに関わるあらゆる意味構築過程を含んでおり、それを通じた社会関係、あるいは社会過程の形成・活性化の動態を分析することが可能となるのである（Couldry 2012 : 44, 57）。

第二は、「メディア実践」の結果として表象される「社会的なもの」をめぐる問題である。クドリーは「社会的なものの表象」が従来の批判的コミュニケーション論における「現実の構築」に留まらない点を強調する。メディア実践は、「社会的現実」のみならず、そうした社会的現実の基盤となる「カテゴリー」も意味構築する。カテゴリーは「『表象』と

して社会的世界を秩序化する事物であり、同時に構造化された意味内容である」(Couldry 2012:62)。この概念は、社会における認識や経験の基盤、すなわち「時間」「空間」「因果」などを指し示す(デュルケム 1912 = 1975:30)。このことは、「社会的なもの」の表象がメディア実践を通じて構築されるとともに、一度構築されると今度はその後のメディア実践を可能にする枠組みとなることを意味している。また、それは、「社会的なもの」の表象、そしてそれを可能にする「カテゴリー」が権力概念と密接に関連していることを示している。

クドリーによると、これらの「実践」と「表象」は「社会的なもの」を秩序化するメディアの「象徴権力」でもある。

メディア権力の社会的機能を理解することは、日常生活を実際に価値づけ、組織化する方法の複数性を承認し、他方で日常生活におけるメディア言説の普遍化の力を認めることである(Couldry 2012:65)。

メディアの象徴権力は、「社会的なもの」を議論の余地のない「普遍的なもの」、「自然なもの」として受け容れさせる、という点において従来のイデオロギー概念と重なり合う。しかしながら、それがメディアのメッセージ内容の効果のみに還元されないと強調する点が異なる(Couldry 2012:65)。換言すると、メディアの象徴権力は特定の「社会的現実」を自然化するだけでなく、そうした「現実」の構築を可能にする枠組み自体をも自然化するのである。クドリーが強調するのは次の二点である。第一に、「社会的なもの」を秩序化するメディアの象徴権力は多様な様式となる。すなわち、それはメディア実践の中にさまざまな形で組み込まれている。第二に、メディアの象徴権力は「自然なもの」や「普遍的なもの」を表象する中心的な参照点としてメディアを特権化する。クドリーはこのことを「メディアによって媒介された中心という神話」と呼ぶ(Couldry 2012:67)。

この「神話」は、特定のイデオロギー内容による効果というよりは、今日のメディア環境における人々の慣習や儀礼の反復・再生産を通じて強化されている。情報化が進展し、複雑化の度合いを増す現代社会において、メディアを参照するだけで社会のあり方、そして社会で生じるあらゆる出来事を認識、理解することは不可能である。つまり、メディアは究極的には「中心」たりえない。しかし、それにもかかわらず、メディアは「普遍的な参照点」として機能する。それはメディア表象を「社会的なもの」全体の表象とみなして行為することが「儀礼化」し、現代社会において根深く埋め込まれているからである。その結果、メディアの表象は「普遍的なもの」として機能し、また、メディアを参照するメディア実践は慣習化し、反復される。こうして「社会的なもの」は自然化し、「沈殿化」する。

しかし、このようなメディアによる「社会的なもの」の全体化効果は強固なものではない。メディア実践の中にはそうした「儀礼」や「カテゴリー」を揺るがし、「社会的なもの」の変化や複数の「社会的なもの」の競合を生じさせる契機もまた組み込まれている。したがって、「社会的なもの」は常に部分的な普遍化に留まり、「社会的なもの」の変化や競合、すなわち「政治的のもの」に対して開かれたものと理解されるのである。

## ▶ 4 「声」と「政治的なもの」

### 4-1 新自由主義と「声」

以上のように、クドリーのアプローチは、従来の批判的コミュニケーション論の問題構成を継承しつつ、「メディア実践」「カテゴリー」「儀礼」といった概念を通じて「社会的なもの」の秩序化を捉える新たな視座を提供するものである。重要な点は、クドリーの問

題関心は「社会的なもの」の秩序化の編制原理の解明に留まらず、それによって生じる抗争や抵抗に対しても向けられている点である。つまり、クドリーのメディア理論において、「社会的なもの」の特定の編制原理のもとで、何が統制・抑圧・排除されているのか、さらにはそれがどのようにして「政治的なもの」として再活性化しうるのかという問題関心を見出すことができる。そして一連の過程にメディアが果たす役割、あるいはメディア実践の中に「政治的なもの」の再活性化の契機が組み込まれる様態も同様に問われている。以下ではクドリーのメディア理論において「政治的なもの」がどのような概念や視座によって分析されうるのかを明らかにする。

今日のメディアと政治の状況を分析する上で、クドリーは「新自由主義における声の危機」という議論を展開している (Couldry 2010; 2011)。議論は次のように要約される。第一に、「新自由主義」の言説を通じて「社会的なもの」が編制、秩序化されている。第二に、そこでは「声」を発すること、そして「声」を聴くことが統制・抑圧・排除されている。第三に、その一方で「声」は「ポスト新自由主義」の新たな政治原理＝「政治的なもの」を構想する可能性を有している。そして第四に、こうした「声」をめぐる政治において、今日のメディア環境やメディア実践がその中心的場である。このように、クドリーは「新自由主義」におけるメディアと政治の関係を「声」概念によって分析している。

「声」とはいかなる概念であろうか。クドリーは「声」を「過程」と「価値」という二つの観点から捉える視座を提示している (Couldry 2010: 1)。「声」を「過程」として捉える場合、それは「自分自身に関して説明すること」を意味する (Couldry 2010: 3)。すなわち、自分自身や自らの生活、そしてそれらの基盤となる世界について語る、あるいは物語を提供することである (Couldry 2010: 7)。クドリーはそうした「自分自身に関する説明」が自己アイデンティティを構築する過程であるだけでなく、他者との関係性を構築する過程でもある点を強調する。ここではジュディス・バトラーの議論に依拠しつつ、「自分自身を説明すること」には他者との応答可能性、他者に応えるという「責任」が伴うことが指摘される (バトラー 2005 = 2008)。つまり、「声」は他者に対して語りかけ、あるいは応答し、それらを通じて他者と世界を共有する過程なのである。

このことは「声」を「価値」と捉えることに結びつく。「声」は社会的に位置づけられている。それは「声」の可能性と不可能性に関連する。主体が自分自身を「十全に」説明することは究極的に不可能である。それは「語る」という行為そのものに起因すると同時に、政治的、社会的、文化的諸条件、とくに権力関係によって影響を受けるからである。しかし、それにもかかわらず、主体は他者との応答可能性において「声」を発する責任を有する。また、それがゆえに、自身と他者が「声」を発することを可能にする必要がある。ここに「声」を「価値」として捉えることの重要性が存在する。すなわち、「声」を承認し、尊重し、可能とするような枠組みを条件づけることが主体と社会に要請されるのである。

#### 4-2 新自由主義における「声」の統制・抑圧・排除

クドリーは新自由主義のドクトリンが「社会的なもの」の構成原理となった結果、「声」の価値が制約され、抑圧されていると批判する (Couldry 2010: vi)。なぜならば、新自由主義は社会生活や政治的な対立・抗争を市場原理の観点から意味づけ、評価するからである (Couldry 2010: 147)。つまり、ここでは声の「多様性」は経済・消費の次元では担保されるものの、例えば政治的次元における少数派の「声」を尊重するような姿勢は後退するのである。クドリーはこの新自由主義が「社会的なもの」の支配的言説を編制する過程を次のように要約する (Couldry 2010: 45)。第一に、本来の意味での「新自由主義」としての「市場原理主義」が経済的な領域で意味構築される。第二に、「市場原理主義」が「新自由主義のドクトリン」へと変容する。これはより広範なメタファー、言語、技術、



組織原理を指し示す。この段階に至ると本来の「市場原理主義」が政治制度や政策の諸領域を意味づけるドクトリンとして機能するようになる。例えば1970年代後半から80年代にかけて英国で展開された「サッチャリズム」はこの「新自由主義のドクトリン」に基づく政治戦略や政策が展開され、ヘゲモニーを獲得していった過程である。そして第三に、「標準化 (normalization)」が生じる。ここでは日常的な社会組織や社会的想像の中に新自由主義が埋め込まれている。いわば、新自由主義が「自然化」した段階である。このようにクドリーは現代を新自由主義が「社会的なもの」の構成原理となり、「沈殿化」が進展しつつある状態と論じている。

新自由主義が「社会的なもの」の構成原理となった状況において、クドリーはメディアが果たす機能を批判的に分析する。すなわち、メディアが発達、多様化し、日常生活に深く組み込まれた現代において、メディア実践やメディア表象はさまざまな形態を通じて日常生活の中で新自由主義の「沈殿化」に寄与するのである。

第一に、メディアは新自由主義の規範やコードの参照点となる。それは特定のニュースやテレビ番組のメッセージの読解を通してだけでなく、日常生活におけるメディア実践の「儀礼化」を通じて参照される。クドリーによると、英国における「リアリティTV」というジャンルは新自由主義に適合した価値観や振る舞いを身につける準拠枠として機能しているという (Couldry 2010: 第4章参照)。

第二に、市場原理の影響を強く受けている今日のメディアは「時間」や「空間」といった「カテゴリー」を新自由主義に適合した形態へと変容させる。例えばメディアと政治の「共生」の進展は、政治のリズムをニュース生産のリズムへと近づけることになる。その結果、政治が本来有している多様な時間は「即時性」という一つの時間カテゴリーへと変容し、収斂していく (Couldry 2010: 83)。

メディアによって進行する新自由主義の「沈殿化」は「声」の多様性や価値を制約する。すなわち、日常生活や政治的な対立・抗争を「新自由主義」のドクトリンによって意味づけることは、「声」を市場原理によって評価することとなり、長い時間をかけた対話や少数の「声」に耳を傾けることに価値を置かないことになるからである。そして日常生活に組み込まれたメディア実践と表象はそうした言説編制を「自然なもの」として受け入れさせる権力作用を有するのである。

#### 4-3 「声」の救済と「政治的なもの」の可能性

クドリーによる分析の射程は新自由主義による「声」の抑圧・排除のプロセスのみならず、「ポスト新自由主義」をめぐる新たな「社会的なもの」の構築・制度化のために、「声」をどのように価値づけるかという問いも含んでいる。いわば、新自由主義への対抗言説を編制する「政治的なもの」として「声」を捉え、その可能性を論じているのである。

そうした対抗政治の構想において、クドリーは次の点に注意を促す。第一に、これまでの議論からも明らかなように、それは新自由主義の言説に回収されえない多様な「声」を発見するにとどまらない (Couldry 2010: 137)。それと関連して第二に、デジタル化の進展やインターネットの発達といった近年のメディア環境の変化は「声」の複数化を可能にするが、対抗言説の編制を保証するものではない (Couldry 2010: 143)。日常生活における「多様な声」の存在、そして新たなメディア環境が可能にしたネットワークという形式を「発見」するだけでは十分ではない<sup>9)</sup>。どのようにして複数の「声」が対抗言説のネットワークを構築しうるかというメカニズムの分析こそが重要である。こうした見解に基づいてクドリーは「声の相互作用の次元」、すなわち複数の声が相互に関係性を構築する視座が重要であると指摘する (Couldry 2010: 143)。

それでは複数の声を関連づける相互作用の次元とはいかなるものであろうか。こうした

新たな批判的コミュニケーション論の分析概念の構想において、クドリーが注目するのは「聴くこと (listening)」という概念である。

クドリーは「聴くこと」が次の機能を果たしうると指摘する。第一に、聴くことは新たな「声」やこれまで沈黙を余儀なくされていた「声」の存在を承認する (Couldry 2010: 145)。しかし、そうした姿勢は「声の複数化」の容認に留まらない。すなわち、第二に聴くことは「世界の共有」につながり、新たな関係性の構築を可能にする (Couldry 2010: 146)。とくに、「聴くこと」を通じて通常は互いに直接関係性を持たない「声」やアイデンティティに新たな関係性が構築する点を強調する。

以上のように、クドリーにとって今日の「政治的なもの」は「声」をめぐって展開されるのであり、その中でも「聴くこと」という概念は新たな「社会的なもの」の構築の基盤となることが了解される。すなわち、「声」と「聴くこと」という二つの概念が批判的コミュニケーション論の視座転換の鍵となるのである。

興味深いのはオーディエンスによるメディア・テキストの能動的な「読み」から発展してきたカルチュラル・スタディーズ以降のメディア実践の議論の中でこの概念を提示した点である。また、デジタル化が進展し、従来の「受け手」＝オーディエンスが情報を発信する機会、すなわち「声」を発する機会が増えているメディア環境の中であえて「聴くこと」を強調する点である。クドリーにとって「聴く」というメディア実践は、今日のメディア環境において展開される「政治的なもの」の諸相を明らかにするための新たな分析概念であり、同時にカルチュラル・スタディーズが直面していた理論的困難を乗り越えるためのものである。このように、クドリーの「聴くこと」に対する注目は、従来のカルチュラル・スタディーズによって主導されてきた批判的コミュニケーション論の議論から大きな視座転換を図っているとみなすことができる。

## ▶ 5 新たな批判的コミュニケーション理論の展開へ向けて

本論ではクドリーの議論を手がかりにカルチュラル・スタディーズ以降の批判的コミュニケーション論の理論的可能性について検討を加えてきた。政治理論や社会理論を積極的に参照しながら展開されるクドリーのメディア論は今日の理論研究において独自の位置を占めていることがわかる。すなわち、カルチュラル・スタディーズの批判的コミュニケーション論を出発点としつつも、「能動的オーディエンス論」以降のカルチュラル・スタディーズの潮流とは異なるメディア実践と権力の議論を展開している。また、デジタル化やインターネットなどの新たなメディア環境における批判的コミュニケーション論を志向しつつも、技術決定論やネットワーク社会論で提示されるような政治参加論の立場は採用しない。日常生活の秩序化においてメディアが果たす機能と、それがもたらす抑圧や統制への異議申し立ての可能性を「儀礼」「カテゴリー」そして「声」といった概念を用いながら論じる点にクドリーのメディア論の特徴がある。

だが、何よりも重要なのは、クドリーの批判的視座が日常生活における「政治」の発見およびその複数化というプロジェクトのみに還元されない点である。「社会的なもの」の秩序化に関する一連の議論は、「政治」の契機が複数存在しているにもかかわらず、むしろそれらがいかに日常生活の中で不可視化しているのかを強調するものである。とくにクドリーは自らの理論的知見を用いて新自由主義のヘゲモニーという政治的・社会的状況について一定の説得力のある議論を展開している。このことは、本来的に多様な「政治」の可能性が統制・抑圧されるメカニズムを今日の政治社会とメディア環境から分析することを通じてカルチュラル・スタディーズ以降の新たな分析枠組みを再構築することの重要性を示している。

無論のこと、クドリーは「政治的なもの」の再活性化の可能性を否定しているわけではない。これまでの議論からも明らかなように、クドリーは新自由主義の言説編制において、「声」が統制・排除されていること、また、「声」がポスト新自由主義の民主主義の構成原理と位置づけられることを論じた。これがクドリーの議論から導き出される「政治的なもの」であり、ここに新たな批判的コミュニケーション論の構想可能性があるのである。

以上のクドリーの理論的取り組みを踏まえつつ、とくに重要な二つのキーワードである「声」と「聴くこと」を中心に新たな分析モデルを構想することが今後の批判的コミュニケーション論の課題となる。本論では、次のような理論的発展可能性に注目したい。

第一は、コミュニケーション概念そのものの再構成である。すなわちそれは「声を発すること」、「声を聴くこと」、そして「異なる声を結びつけること」をコミュニケーション過程の中に位置づける取り組みである。そしてそうした「声をめぐる政治」の過程がアイデンティティ、権力、民主主義といった問題系とどのようにかわるのかを明らかにしていくことが重要である。

第二は、ジャーナリズム研究への応用である。つまり、「聴くこと」に依拠してニュース生産過程を分析する理論的枠組みを検討することである。「聴くこと」からニュースの生産過程を捉える作業は、「声をめぐる政治」の主たる領域としてジャーナリズムを位置づけるだけでなく、ジャーナリズムの規範的研究にも寄与する可能性を有する。

これらの試みを進展させるためには批判的コミュニケーション論の既存の諸アプローチとの比較検討だけでなく、「声」や「聴くことを」めぐるその他の政治理論や社会理論を参照することが肝要となる。冒頭でも論じたように、これまで批判的コミュニケーション論を発展・深化させてきたものは、まさにこうした政治理論や社会理論との対話である。

## ●注

1. こうしたカルチュラル・スタディーズの理論的視座は主としてスチュアート・ホールによって提示されてきた。詳細については山腰 (2012) の第2章を参照のこと。
2. 「見えざる政治」への関心は、西側先進諸国の誇る自由と民主主義の中に、様々な矛盾や抑圧が潜んでいることに対する告発への意志としばしば結びついていた」という指摘も参照のこと (川崎 2010: 3)。
3. 周知の通り、能動的オーディエンス論はオーディエンスによるメディア・テキストの多様な読みを発見した。つまりそれは、オーディエンスがメディアのメッセージを受容し、そうしたメッセージのイデオロギーによって影響を受けるだけの受動的な存在ではないことを意味する。この場合、オーディエンスは多様な読みを通じてアイデンティティや社会的価値を意味構築する存在とみなされるのである。
4. 典型的には、カルチュラル・スタディーズのメディア研究、とくに能動的オーディエンス論は1970年代後半以降の先進産業諸国のヘゲモニーである「新自由主義」について有効な知見を提供できていないと批判される。なお、後述のニック・クドリーによる新自由主義の分析はこうした批判に対する応答の一つとみなすことも可能である。
5. カルチュラル・スタディーズのメディア研究は、日常生活におけるあらゆる側面が「政治」であると主張する (シルバーストン 1999=2003)。また、同様の視点は日常生活における多様な闘争がネットワーク状に展開し、今日の新たな政治的主体を構築するという「マルチチュード」をめぐる議論とも通底する (ネグリ=ハート 2004=2005)。
6. ヘゲモニーとは特定のイデオロギーを社会全体に浸透させた結果確立する権力形態を指すが、とくにここでのヘゲモニーとは、政治社会のあらゆる意味構築を可能にする言説編制の形態を意味する。こうした見解はエルネスト・ラクラウらによって提起され、発展してきた。この場合、ヘゲモニー政治は以下のような過程として説明される。第一に、政治社会に対する異議申し立てを行う主張やその基盤となるアイデンティティが生成する。第二に、複数の主張やアイデンティティの間に意味関係が構築される。第三に、そうした意味関係が拡張すると、社会全体を新たに意味づけるコードが産出される。第四に、この新たなコードが政治社会のさまざまな出来事や争点を意味構築する機能を果たすと、そうしたコードによる政治社会の意味づけが「常識」として受け取られるようになり、ヘゲモニーが生まれる (Laclau 1990; Torfing 1999; 山腰 2012)。
7. 「政治的なもの」と「社会的なもの」の関係性については Martin (1999) も参照のこと。
8. 例えばエミール・デュルケム、ピエール・ブルデュー、リュック・ボルトンスキー、ジュディス・パトラ、アマルティア・センといった理論家たちの諸概念である。
9. したがって、カルチュラル・スタディーズやマルチチュードのような「多様な政治の発見」にとどまるアプローチは「ポスト新自由主義」の政治社会の構想において、十分な知見を提供しえないと批判されることになる。

とくにクドリーは多様な政治的抵抗が「ネットワーク」的に展開することを強調するマルチチュードに対して、それが自動的に生成するように論じていることを批判している (Couldry 2010: 144)。

## ●付 記

本研究は慶應義塾学事振興資金による「ジャーナリズムとメディア再考—思想・市場・規制」(2013年度, 研究代表者: 山本信人慶應義塾大学教授)の成果の一部である。

## ●引用・参考文献

- Bertramsen, R. B., Thomsen, J. P. F. and Torfing, J. (1991) 'From the Problems of Marxism to the Primacy of Politics' in R. B. Bertramsen, J. P. F. Thomsen and J. Torfing, *State, Economy and Society*, Unwin Hyman: 1-34.
- Couldry, N. (2008) 'Form and Power in an Age of Continuous Spectacle', in D. Hesmondhalgh and J. Toynebee (eds.) *The Media and Social Theory*, Routledge: 161-176.
- (2010) *Why Voice Matters: Culture and Politics after Neoliberalism*, Sage.
- (2011) 'The Project of Cultural Studies: Heretical Doubts, New Horizons', in P. Smith (ed.) *The Renewal of Cultural Studies*, Temple University Press: 9-16.
- (2012) *Media, Society, World: Social Theory and Digital Media Practice*, Polity.
- Ferguson, M. and Golding, P. (eds.) (1997) *Cultural Studies in Question*, Sage.
- Laclau, E. (1990) *New Reflections on the Revolution of Our Time*, Vero.
- Martin, J. (1999) 'The Social and the Political' in F. Ashe (et. al. eds) *Contemporary Social and Political Theory: An Introduction*, Open University Press: 155-177.
- Smith, P. (ed.) (2011) *The Renewal of Cultural Studies*, Temple University Press.
- Torfing, J. (1999) *New Theories of Discourse: Laclau, Mouffe and Zizek*, Blackwell.
- 川崎修 (2010) 『「政治的なもの」の行方』岩波書店。
- R. シルバーストーン (1999 = 2003) 吉見俊哉, 伊藤守, 土橋臣吾訳『なぜメディア研究か: 経験・テキスト・他者』せりか書房。
- E. デュルケム (1912 = 1975) 古野清人訳『宗教生活の原初形態 (上)』岩波書店。
- A. ネグリ = M. ハート (2004 = 2005) 幾島幸子訳『マルチチュード (上) (下)』日本放送出版協会。
- J. バトラー (2005 = 2008) 佐藤嘉幸, 清水知子訳『自分自身を説明すること: 倫理的暴力の批判』月曜社。
- E. ラクラウ (1996 = 2002) 青木隆嘉訳『脱構築・プラグマティズム・ヘゲモニー』C. ムフ編『脱構築とプラグマティズム: 来たるべき民主主義』法政大学出版局: 91-130 頁。
- 山腰修三 (2012) 『コミュニケーションの政治社会学: メディア言説・ヘゲモニー・民主主義』ミネルヴァ書房。

山腰修三 (慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所准教授)